

【学園研 B】

1. 研究課題名

教育学部生のライフスタイル支援の方法に関する実証的研究

2. 研究代表者名

所属学部： 教育学部

職名 準教授

氏名 山田 真紀

3. 研究分担者

なし

4. 研究成果の概要（1, 200字程度で記入。ただし、図・グラフは使わないこと）

【研究の目的】

本研究は、教育学部の学生に自分のライフスタイルを創造させていくうえで、教員はどのようなサポートができるかをテーマとしたアクションリサーチである。保育士資格や幼稚園・小学校の教諭の免許状は、他の教育機関でも取得できるので、四年制大学、さらには女子大である相山でこれらの免許状や資格の取得を目指すことの意味を考えてみる必要がある。相山女学園大学がこれまでさまざまな女性の生き方をサポートしてきたように、教育学部でも、「免許や資格を与えるだけではなく、教師として、保育士としていかに生きるのかというライフスタイルをもバックアップしていく」ということを存在意義としていきたいと考えている。

【研究の経過】

5月：研究計画の作成

5月～6月：人間論におけるゲストスピークの実施（全4回）

5月～6月：人間論におけるワークシートをもちいた人生設計（全2回）

7月～10月：学生のリフレクションペーパーの分析

12月：研究のまとめ

【研究の成果】

本研究を始めたのと同時に、人間論の全学共通化WGが発足し、人間論が「人間とはいかなる存在か」「人間はいかに生きるべきか」を追及する場であることを全学部一致で確認することができた。これは、相山女学園大学が、それぞれの学部の独自性を発揮しつつ、さまざまな女性の生き方を支援していく教育機関であろうとする姿勢を示すものである。この研究を通して、教育学部の取組は、その先駆的な取り組みとして評価されることになり、時期を得たよい研究テーマを掲げ、研究できたことに満足している。

成果1 ゲストスピークの効果

学生は、特に入学直後の新一年生は、職業としての保育職・教職を漠然としたあこがれというレベルで思い描いている。しかしながらゲストスピークを通して、保育職や教職に就くということはどういうことか、自分の私生活と職業生活を両立させるということはどういうことか、ということが具体的になり、自分と10歳から15歳ほど年上の先生方の姿を通して、自分の近未来の将来像を描くことができたようである。授業最後に行ったアンケートの自由記述欄には、「ゲストスピークでは実際に職場で働いている先生の様子が分かり、とても勉強になった」「自分の将来設計を考えることができたので良かった」等、ゲストスピークを肯定的に評価する記述が35件みられた。

成果2 将来設計のワークブックの効果

「相山の4年間をどう過ごすか」「将来自分はどう生きていくのか」を考えさせるワークブックを作成し、学生に記入してもらいながら、情報提供するという活動を行った。入学直後でまだ計画が明らかではなく、記入に困難を感じる学生も多かったが、授業最後に行ったアンケートによると、「4年間は長いようで、計画的に過ごさないとあっという間に終わりそう」「大学の流れ（いつ定期テストがあり、いつ夏休みがあるか、教員採用試験がいつあって、卒業論文はいつ書くのか）の流れがわかってよかった」という肯定的な意見が多くみられた。特に、1年生はまったく大学の仕組みがわかっていないので、ガイダンス的な役割を果たすことができた。

【反省と今後の課題】

ライフスタイル支援は女子大の生き残りの重要な戦略的拠点となりうる。教育学部では人間論の一部を使って行っているにすぎないが、学年ごとに最低ひとつのガイダンス的授業、もしくは指導教員制度を用いた仕組みを設け、4年間を通じて系統的にライフスタイルの創造を支援していく枠組みが必要であると感じる。各学部にそのような仕組みを整えば、名実ともに「相山女学園大学は女性のさまざまな生き方をバックアップする大学である！」ということを示すことができるようになるであろう。この研究は今後も継続的に行っていきたい。